

## 多摩の地域史研究を発展させた3人の歴史研究者

〈はじめに〉

昭和34年（1959）春、八王子に3人の若き大学関係の歴史研究者が現れた。1人は北村透谷研究を目指した東京経済大学の色川大吉先生、1人は早稲田大学政経学部の正田健一郎先生で、八王子織物史の研究と取り組もうとしていた。いま1人は、都立大学の大学院を卒業したばかりの村上直先生である。村上先生は、代官と八王子千人同心の調査を目指していた。

当時八王子では『多摩文化』という地域史専門誌が発足したばかりで、若き3人の研究者を両手をあげて歓迎し、協力を惜しまなかった。

さらに多摩地域の動向をみると、北多摩郡小平町（小平市）では同29年4月に明治大学の木村礎先生、明治大学附属明治高等学校の伊藤好一先生らを中心に東京大学の先生や学生を動員して小平町誌の編纂に着手、34年3月に1400ページにおよぶ『小平町誌』を発刊した。それは地元資料を駆使したまさに「地域史」で、多摩地域における市史・町史の最初の金字塔でもあった。

〈色川先生の活躍〉

色川先生と筆者がはじめてあったのは昭和34年の春、自分史の先駆的な試みである「ふだんぎ」グループの創始者橋本義夫氏宅であった。その数日後、一緒に調査しようという先生からお手紙をいただき、私は先生のお手伝いをするようになった。

最初の大きな成果は、「須長家文書」の発見で、困民党の指導者須長漣造に関する資料であった。透谷が上川口村（八王子市上川町）でいわゆる「幻境生活」をしていたのは、困民党事件の最中の事であった。困民党事件は民権運動の調査と同じく透谷研究の重要なポイントであった。この須長家の資料をもとに先生は35年11月の『歴史学研究』に「困民党と自由党」を発表した。さらに翌年同誌に「自由民権運動の地下水を汲むもの」を発表され、日本近代史のあいだで「地下水」という言葉が流行ったという。

流行語といえば「明治人」と「自分史」も色川先生の造語である。「明治人」は民権期に八王子で活躍した藤沢の医師で民権家の平野友輔の一代記である。色川先生の活躍はさらに八王子から西多摩の五日市に進み、五日市町深沢（あきる野市）の深沢家から「五日市憲法草案」を発見する偉業をつくった。先生の研究は、これらの業績を踏まえて『明治精神史』に結実し、その本は戦後の名著の一冊に選ばれている。

〈正田先生と『八王子織物史』〉

正田先生は、早くから八王子織物史の研究を目指していた。昭和34年のはじめ、私は八王子織物工業組合から織物史編纂を依頼され、資料集めに奔走していた。組合からの要請がはじめより次第に大きくなったため、正田先生の話をしたところ承諾を得、すぐさま大学に行き正田先生にお会いした。先生は承諾され、安沢秀一先生らをはじめ、斎藤博氏ら数氏で織物史研究グループが発足した。

織物史研究グループは地域史研究史『多摩文化』にも積極的に協力し、同誌 11 号に「明治十年代の農民負債」、12 号には「八王子の生成と発展」等々を發表した。

この様な経緯を経て、昭和 40 年 7 月には 800 ページ近い『八王子織物史』上巻を刊行した。上巻は八王子織物の発生から明治初年までである。この時代を扱った『八王子市史』下巻も未完であった。そのような意味でも未開拓の分野の新たな歴史手法での開拓であった。

#### 〈村上直先生と日野市〉

村上先生はある講演会で次のように述べている。

「昭和 34 年頃、戦後の復興のまだ十分でない時期に、私は多摩を見て調査や研究を始めたのです」

先生の研究テーマは、代官と八王子千人同心であった。代官は関東十八代官を配下にした大久保長安で、長安の八王子周辺の事跡はまったく未開拓の分野であった。千人同心については『八王子市史』下巻に「八王子千人同心」を執筆し、さらに平成 2 年に『八王子千人同心史』資料編 I・II を、さらに平成 4 年には『八王子千人同心』通史編の大著を監修している。そのほかにも千人同心史に関しては、数冊の著作を刊行している。

日野市との関係も深い。昭和 47 年（1972）から日野市史の編さんが開始した。執筆陣は監修に児玉幸多先生（当時学習院大学教授、48 年より学習院大学学長、のち名誉教授）を迎え、各大学の教授が参加し、多摩地域において注目される構成員であった。村上先生（当時法政大学文学部助教授、48 年より教授、後名誉教授）はこのなかで近世を担当、『日野市史史料集』近世 1 交通編、『日野市史通史編』近世二（中）・（下）など千人同心を中心に執筆している。

市史編纂の事業は、平成 10 年 3 月『日野市史』通史編四 近代（二）・現代を最終巻として幕を閉じた。この後は、市史編纂事業で収集した資料やその後発見された資料の活用や保存について指導・助言する機関として「日野市古文書等歴史資料整理編集委員会」が立ち上げられ、委員会の長には児玉先生が、続いて村上先生が就任した。その間にも先生は、法政大学が行なった日野市域の歴史編纂事業の調査団長として、平成 9 年『高幡山金剛寺文書』上・下 2 冊をまとめられている。

これら 3 人の歴史学者のもとには若手の歴史研究者や学生が集まり、三先生の影響は地域史の進展に革新的な役割を果たした。

（日野市古文書等歴史資料整理編集委員会委員長 沼 謙吉）

\* 村上直先生は、今年 2 月 10 日逝去されました。享年 88。謹んでご冥福をお祈りいたします。

\* 平成 26 年 5 月 15 日付広報ひの掲載の「日野の歴史と民俗」162 号の詳細版です。

日野市郷土資料館にて印刷版を配布しています

問合せ先：日野市郷土資料館

（Tel 042 - 592 - 0981 e-mail museum@city.hino.tokyo.jp）